

NPO法人地域再生研究センター 主任研究員 井原 友建
(羽尻区むらづくりアドバイザー)

平成 23 年度はとにかく、むらづくり・地域再生を進めていく上で無くてはならない『地域力』を高めることを目標に、この事業に取り組みました。すなわち、自らの地域に関心を持ち、現状だけでなく、これまでの経緯も含めて理解し共有することが大きな狙いだったのです。身近に居ながら、廃村の歴史など、初めて知った地域の方々も多かったはず。

市民が都市に対して持つ自負と愛着を「シビックプライド」と言います。地域を守っていくためには、やはりふるさと、わがむらに誇りを持つことが一番です。ちょっと都会的なニュアンスが強いので、敢えて言うと『コミュニティプライド』

でしょうか。この事業に関わった地域外の誰もが、羽尻の類い希な自然、環境、歴史のすばらしさに感動しています。地域のみなさん自身が、このすばらしさを常に心にとどめ、まさにコミュニティプライドを持ち続けること。これが地域再生の第一歩です。

今年の事業では至らなかったこと、やり残した宿題がまだまだあります。より一層コミュニティプライドを強くし、羽尻の地域力を高めるために、引き続き応援してまいります。今後とも羽尻区のみなさんのご協力をお願いします。

『さあ、みんなで走りだそう!!』

羽尻区むらづくり委員会 松田 喜彦 ～これからのむらづくりに向けて～

このまま、何もしなければ集落がどんどん衰退していく。そんな危機感をあおるわけではありませんが、「今、立ち上がらない」という思いを強くしています。

自分たちには何の変哲もない日常も、見る角度を変え、当てる光を変えると、また違った輝きを放つことを、羽尻区に関わっていただい

ている多くの方々から教えていただきました。豊かな自然、先人の培った歴史・伝統を貴重な財産として次の世代に引き継いでいかなければなりません。

大勢の方々の力をお借りしながら、共に一歩ずつ前に進んでいけますよう、今後ともよろしくお願いいたします。

羽尻区長 中嶋 貴太郎 ～羽尻区が目指すところ～

羽尻区は、戸数 77 戸、人口 228 人で、その内、一人暮らし世帯が 16 戸もあり、高齢化率は 39%になっています。何とかせんとあかんという思いから、平成 22 年に区の役員を主体とする「むらづくり委員会」を立ち上げました。

行政の力添えをいただきながら、NPO 法人地域再生研究センター 井原友建アドバイザー、兵庫県立大学 INAKA 応縁隊の皆さん、力を貸してください。

阿瀬溪谷や湯の原温泉オートキャンプ場を核とした活性化策や、区民の助け合い、特に一

ダイアリー
羽尻の今昔、歳時記 ～村のガイドブック～

平成24年(2012年)3月

編集・デザイン: 兵庫県立大学環境人間学部INAKA応縁隊(農村計画研究室)

校 正: 特定非営利活動法人 地域再生研究センター

協 力: 豊岡市日高町羽尻区、羽尻区むらづくり委員会、湯の原温泉オートキャンプ場管理組合

この冊子に関するお問い合わせは、特定非営利活動法人 地域再生研究センター兵庫事務所
【TEL: 078-230-0220、E-mail: info@rirej.jp】まで。

この冊子は、兵庫県「地域再生応援事業」の助成を受けて作成しました。

兵庫県豊岡市日高町

羽尻



はーとが
いっばい
じもとを
愛する
その郷
むら

ダイアリー
羽尻の今昔、歳時記
～村のガイドブック～

はじめに

第一幕 金山・若林・分尾の廃村 ヒアリング調査

第二幕 羽尻まるごと四十八滝

第三幕 湯の原温泉

第四幕 羽尻区むらづくり 委員会の活動

第五幕 HAJIRI あるあるマップ

おわりに

湯の原温泉オート
キャンプ場

POST CARD

(P1~7)

(P8~9)

(P10~11)

(P12~15)

(P16~19)

(P20)

(P21)

(P22~23)

(P24~25)

阿瀬溪谷

はじめに

日本全国において中山間地域の集落が存続の窮地に立たされています。人口減少、高齢化、担い手不足、農地の荒廃、そして経済の停滞。多くの問題を抱える日本全国の集落の姿は、人口の減少という国が始まって以来、初めての経験をする日本という「国の未来」を現しているようです。

このまま廃れてしまうのか？

日本の『ふるさと - 郷』

では、集落の住民たちは自分たちの故郷が衰退していく姿を何もせず見ているだけなのでしょうか。いや、そうではありません。日本各地の集落では、そこに住む住民たちが自らの力で、故郷を盛り上げるため、また途絶えさせないために試行錯誤を繰り返しながら、精一杯、様々な取り組みを行っているのです。

そして一致団結した

むらづくりへの『目覚め』

この羽尻の地においても、それは例外ではありません。ふるさとを守るため、そして、そこに住む人々が幸せに暮らせ、還ってくる人を温かく迎えるために「郷」を再生しようとしています。そして、平成二十三年八月、彼らの意志に共感し、地域に再び光をあてるため、地域振興の若い精鋭たちがこの羽尻の地に集まりました。

これこそ・・・

羽尻・阿瀬溪谷 盛り上げた〜い(隊)!!

私たち“羽尻・阿瀬溪谷盛り上げた〜い(隊)!!”は兵庫県立大学 I N A K A 応縁隊・NPO法人地域再生研究センター・羽尻区むらづくり委員会のメンバーで結成されました。

そして、私たちは羽尻、阿瀬溪谷の魅力に再び光をあて、多くの人々に伝え、守ることを目標として、このガイドブックの作成に取り組みました。

I N A K A 応縁隊員紹介



「トシ」



「リンくん」



「あずにゃん」



「あいかちゃん」



「アッシー」



「あおいちゃん」



「あきちゃん」



「中嶋区長」



「井原さん」



「松田委員長」

I N A K A 応縁隊とは・・・

農山村部における地域活性化事業の支援活動を行うため兵庫県立大学の学生で結成された学生グループです。

「羽尻区むらづくり委員会」とは・・・

「羽尻区を活性化するためになんとかしないといけない!」と地域住民たちによって結成された、むらづくり活動の企画運営組織です。人口が減少し、高齢化も進む羽尻区の将来を憂い、集落の元気アップに向け取り組んでいます。

1976年航空写真
(国土地理院空中写真)

羽尻の昔

▲ 蘇武岳 1074.4m

鉱坑所在位置図

出典：日高町史

(分尾)

河畑

主な田畑

三方小学校

羽尻

阿瀬溪谷

金谷

阿瀬川

(若林)

(金山)

○ 金山峠

羽尻区は、豊岡市の南西部日高町、JR山陰本線江原駅から西へ約12kmのところに位置しています。

かつては、金や銀の産出で栄えましたが、現在は農業を主な産業とする地域です。往時は金山、若林、分尾といった集落もありましたが、現在は羽尻、河畑、金谷の3つの集落からなる約80戸、230人（高齢化率40%）が暮らす地域です。

2007年航空写真
(株式会社パスコ提供)

羽尻の今

▲ 蘇武岳 1074.4m

(分尾)

湯の原温泉
オートキャンプ場

三方小学校

河畑

羽尻

主な田畑

阿瀬溪谷

金谷

阿瀬川

(金山)

(若林)

○ 金山峠

0 500 1000m



第一幕 金山・若林・分尾の廃村

蘇武岳から金山廃村まで約2時間。自然に囲まれながら歩くのはとても気持ちいい！



こんな山奥深いところに当時住んでいたんだね。ここから麓まで下りる大変さ。想像できない！

●豊かだった村での暮らし

- ・農業、林業、狩猟によって人々の生活は支えられていました。自給自足という暮らしは裕福ではありませんでしたが、住民は確かに「豊かさ」に満ちた暮らしをしていました。
- ・男は狩猟を嗜み、彼らの狩猟の腕は近辺の集落の中でも折り紙つき。彼らの狩るウサギは、麓の集落では貴重な食料源でした。
- ・鉱山の幕を閉じてからは、これといった基幹的な産業が発達しなかった地域。住民は時間という概念に束縛されことなく、自給自足で自由気ままな生活を送っていました。



住民たちの生活の名残が今でも残っている。学校跡は四阿(ハイキングコースの休憩所)として使われているんだ。



●三方小学校金山分校

金山集落には学校がありました。三方小学校の分校として建てられたものです。しかし、それ以前から村には学校が存在していました。住民たちでお金を出し合い、先生を呼んで、教育を行っていたのです。金山に赴く先生方は皆、大切にされました。授業のある1週間の間は金山に滞在し、その間、村人たちの手厚いもてなしをうけて過ごしていました。そして、週末には麓へと下り、また再び、週明けには金山へと上がるのです。この金山の往来の際には、必ず村人が同行し、麓の金谷あたりまで送り迎えされていたのです。山奥の学校にまで赴いてくれる先生方は、村人たちにとっては、本当にかげがえのない存在だったのです。

村専用の発電機があるなんてすごい！当時はテレビも見れていたんだって。

●小型発電機の存在

関西電力の計らいで小型の簡易式発電機を有していた金山集落。大きな電力を産み出すため、夜でも村中を無数の街灯が照らし、夜空をも照らし出すその風景は不夜城ともいわれるほどでした。



“金山から出るには2時間かかる”

昔 羽尻地区

ヒアリング調査

それでも住民にとっては

昭和5、6年頃は9戸の家。しかし終戦後、家は6戸と減少してしまいましたが、少ないからこそその家族的な雰囲気があったようです。

✓CHECK 阿瀬溪谷の発電所跡

家が9軒あったころから、発電所を作り自家発電を開始していました。終戦後は関西電力阿瀬発電所と共に改修もされました。このように発電所ができたことで、分校が開き、TVが寄附されるなど、山奥にもかかわらず豊かな生活を送っていたそうです。

子ども達は、中学校から本校に通う必要があり、毎日金山から学校まで往復16kmの道のりを通っていました。おかげで足が丈夫に！！ - 10 -

住めば都

家も村も倒れて腐って無くなってしまう

廃村になる寂しさ

“一人で金山に行くとなんとも言えずに涙がこぼれる”

悲しみを乗り越えて

歴史物語

村人の声より ✓CHECK 三方村誌稿本

職や子どもの教育について考えると、この村から離れる人が増えました。最後の住民の方は離れるとき、地区の最後や親の事を思い、声を出して泣いたそうです。

墓には行けても家の方には行けない。見たくない。荒れている家を見ることは悲しいことだと住民の方は言います。

外に出た人が戻ってきたという話はあまりありません。そして、元住民同士の交流も今ではないそうです。

しかし、金山に人が来るように努めた結果、ハイキングコース、登山道として再び光をあてることができ、たくさんの方が訪れるようになりました。もっと地域について知り、悲しい歴史も明日への活力として培ってきた羽尻の魅力を多くの人に知ってもらいたいです！